

第12回 キキョウ

東京理科大学
薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦

キキョウは秋の七草の1つに数えられるキキョウ科の植物であり、少し広がった鐘状の大きな花を咲かせる。花期は8～9月と残暑が続く中ではあるが、その花冠の紫の深さはいち早く秋の爽涼な空気を感じさせてくれる。古くから観賞用としても親しまれており、八重咲きや白色の花の品種もある。

キキョウの花は雄ずい（おしべ）が先に成熟し、葯が開いて花粉を散らす。一方、雌ずい（めしべ）は花が開いた後しばらくしてから熟し、柱頭の先を5裂に広げるので、同じ花の雄ずいが開いているところは受粉が成立しない。写真2は柱頭がやや開きはじめている様子である。雄ずいと雌ずいが成熟する時期をずらすことで自家受粉を避けていると考えられている。

薬用部位としては根を用い、桔梗（根）と

され有効成分はサポニン類とされている。サポニン類の化合物は水に溶け、振蕩すると持続性のある発泡を得る。日本薬局方においても、この性質を利用してサポニンを含む生薬の確認試験として採用している。これは界面活性作用を有しているためであり、サポニンの「サポ」はラテン語のsapo（石鹼）からきている。また、石鹼のことをシャボンと言ったり、石鹼水で泡を作ったものをシャボン玉と言ったりするが、こちらについては諸説ある中、シャボンに近い言葉が安土桃山時代には使われていたようであるから、当時の交易の状況から考えて、ポルトガル語で同じく石鹼の意味であるsabãoが直接の由来と考えるのが妥当であろう。

桔梗根に含まれるサポニンには鎮咳、去痰作用があることが近代医学で認められている。漢方でも去痰薬とされており、現在では小柴胡湯加桔梗石膏という処方が広く用いられている。本処方ほもと中国の『傷寒論』に収載される小柴胡湯に、桔梗と石膏（骨折した時のギプスや彫刻などに使われる硫酸カルシウムCaSO₄を主成分とした鉱物）を加えた加味方である。このアレンジは我が国の漢方医が編み出したもので、扁桃炎や扁桃周囲

炎に適応がある。一方、「痰」といった時は通常、呼吸器から分泌されるいわゆる「喀痰」を意味するが、漢方ではそれ以上に粘性を持ったドロドロとした体液全般をさす広い解釈をしている。したがって、去痰薬である桔梗もより広い範囲の疾患に用いられる。一例をあげると、排膿散及湯（枳実、芍薬、桔梗、生姜、甘草、大棗）は発赤や腫脹の見られる皮膚の化膿性疾患、瘡瘍に効果を示す処方である。



写真1 キキョウ



写真2 柱頭がやや開きはじめている